

地域の力で復興を

三修専修

【専修大学】ホームページ http://www.senshu-u.ac.jp/

毎月1回15日発行 (定価一部90円) 発行所 専修大学広報課 東京都千代田区東神保町3-8 電話 03-3265-5819(直)

主なニュース

- 2 外務省北米局長迎え講演会／自然科学研究所公開講演会
- 3 社会科学研究所国際財政カンファレンス
- 4 「地方財政の過去・現在・未来」……
- 5 五輪日本選手団がトレーニング
- 6 国内の中核拠点を探索 文スポーツ3ゼミ……
- 7 課題解決型インターシップ活動中／神田神保町探索…
- 8 短期留学生が弓道初挑戦／海外留学・国際交流フェア…
- 9 【石巻専修大学】震災仮設住宅で活動 経営・山崎泰央ゼミ……



九州地方大雨により被災された学生および保護者の皆様へ経済的支援
7月の九州地方における大雨により、被災された学生および保護者の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。本学では自然災害による被災世帯学生に対し、経済的支援を講じています。また、日本学生支援機構奨学生(緊急・応急)の申請も受け付けます。該当する方は、左記までご連絡をお願いいたします。

▽一部(生田) 学生生活課▽一部(神田) 学生生活課▽二部学生生活課▽二部事務課▽大学院生(生田) 生田大学院事務課▽大学院生(神田) 神田大学院事務課▽法科大学院生 法科大学院事務課 (学生生活課)

石巻と釜石に焦点 社会関係資本研究センターがシンポ

東日本大震災から1年4カ月を経た7月14日、被災地復興をテーマにしたシンポジウム「協働社会へのチャレンジ」被災地における社会関係資本を活かす試み〜(社会知性開発研究センター/社会関係資本研究センター/主催)が神田キャンパスで開催された。岩手県釜石市と宮城県石巻市に焦点をあて、地域の力による復興への歩みと課題点を議論した。



▲ 活発な議論が展開されたシンポジウム

なくなる人が出るなど、アンバランスな状況も起きています」と報告した。フェアトレード東北の布施龍一代表は「仮設住宅でのボランティア支援に格差があり、郊外・半島の仮設住宅には孤立しているところも多くある。その孤立を防ぐことが大切。物資配給、炊き出し、仮設住宅団地での自治会形成など継続した支援が必要だ」と訴えた。

シンポジウムでは原田博士・社会関係資本センター代表(大学院経済学)の住処にせず、被災者を生活の場にお返しするのが我々の役目だ。広大な浸水地域に企業を誘致し、新たな雇用創出につなげたい」と語った。

大矢根淳・人間科学部教授(災害社会学)は「東北の浜の復興に、阪神大震災時の都市部と同じ復興政策はあてはまらない。被災地で求められるのは一義的な公共事業としての高台移転ではなく、生業とコミュニティの再興だ」と語った。

「緩やかな絆を持つ」と「孤立する被災者救え」「生業とコミュニティの再興を」

野田佳彦首相の釜石視察のため欠席となった野田武則・釜石市長(昭51法)が、ビデオメッセージで「近代製鉄産業発祥の地・釜石は、第二次大戦での艦砲射撃や、明治と昭和の大津波で壊滅的な打撃を受けながら困難を乗り越えてきた。その経験を踏まえ、『携わず屈せず』の精神で復旧・復興に歩む」と述べた。

玄田有史・東京大学社会科学研究所教授が基調講演。玄田教授は、同研究所のプロジェクト「希望学」のリーダーとして2006年から釜石市の地域調査を行ってきた。その体験から地域の人の力による復元力に期待

を寄せる。地域らしさ(一口カルアイデンティティ)を大切に、復興には▽急いでやることと別に遊びと幅を持つ▽緩やかな絆をもつ▽経験を忘れない仕組みを作る▽ことが必要と語った。

「被災地・石巻からのレポート」では、李東勲・石巻専修大学経営学部准教授が被災直後から始めた牡鹿半島での支援活動を報告。

李准教授は、同大学の学生による災害ボランティアサークルとNPO法人フェアトレード東北の連携で、「在宅被災者」に着目。巡回訪問や生活実態調査を行ってきた。「平等」の名目で、避難所の炊き出しに足腰の弱い高齢者が若者同様に立たされている。衣食住にかかわる不平・不満が多い一方で、支援金や失業保険を得て仕事をし



▲ 坂田隆・石巻専修大学長も会場から発言

<ネット情報・綿貫研究室>

ネットワーク情報学部・綿貫理明研究室が子供たちに「創エネ」教える＝新百合ヶ丘駅前<6面に記事>



子どもたちにタックルされる松本隆太郎選手
子どもたちにタックルされる松本隆太郎選手
子どもたちにタックルされる松本隆太郎選手



<文・新井ゼミ>
文学部・新井勝紘ゼミが「軍事郵便」をテーマにポスター発表<5面に記事>

<商・前川ゼミ>

川崎市多摩区の名産品をプロデュースした商学部・前川明彦ゼミ、馬場一貴さんと香取知江美さん(左側の2人)<2面に記事>

代表選手たちは五輪本番の前に、佐藤満チームリーダー(専修大学経営学部教授、ソウル五輪金メダリスト)のもと本学で強化合宿に臨んだ。「交流会」は、五輪代表選手から直接指導を受けることで、子どもたちが夢と希望を持ってもらうと企画された。

代表選手たちが会場に現れると「わー」と歓声が上がった。ロンドン五輪に向けての抱負が述べられた後、子どもたちは次々とスパイク練習。力いっぱいぶつかって、足を上げてたり腰にタックルしたり。

終了後はシャツの背中にサインをしてもらい、「オリンピック選手になりました」と、松本隆太郎▽同66級・藤村義▽同96級・齋川哲克

「オリンピック選手になりたい」

ロンドン五輪代表選手が子どもたちの練習相手に

この教室は本学レスリング部卒業生が地域の幼児から高校生までを指導するために作られた(社会体育研究所主催)。2009年発足当初数人だった生徒は現在80人に。ヘッドコーチを務める木村元彦さん(平16経営・二部事務課勤務)は「本学の地域貢献活動として定着してきた」と話す。

当日、参加の代表選手は以下の通り▽敬称略。

女子▽フリースタイル55級・吉田沙保里▽同63級・伊調馨▽同72級・浜口京子

男子▽フリースタイル55級・湯元進▽同60級・湯元健一▽同66級・米満達弘▽同74級・高谷惣亮▽グレコローマンスタイル55級・長谷川恒平▽同60級・松本隆太郎▽同66級・藤村義▽同96級・齋川哲克



▲ 代表選手の前で佐藤満教授